

令和6年6月定例会 一般質問

◇訪問看護（看護多機能型居宅介護）

千葉県の要介護・要支援の認定者数

令和4年度

認定者数	認定率
308117人	17.4%

出典 千葉県における介護保険の実績等について

看護小規模多機能型居宅介護

主治医との密接な連携のもと、「通い」、「泊まり」、「訪問介護」、「訪問看護」を利用者の状態に応じて柔軟に提供できるサービス。医療依存度が高くても、住み慣れた場所で在宅療養を望む方の思いにこたえるため、平成24年に創設された。「看多機」は、令和5年時点で全国に952か所あり、鎌ヶ谷市内には1か所指定されている。

松沢 看護小規模多機能型居宅介護事業所の県内の開設数について、また、どれだけの市町村で開設されているのか。

A. 事業所数は、令和6年4月時点で43事業所であり、前年と比べて5事業所増加した。事業所の指定を行っている市町村の数は、本年4月時点で21市であり、前年と比べて3市増加した。

松沢の視点

看護小規模多機能型居宅介護は、事業所がある市町村以外の高齢者には利用が困難な場合がある。さらに、利用者の確保の見込みが立たない等の理由で事業所を誘致することが難しい市町村もあることから、広域利用に関する事前の合意や協議、検討が進められるよう県の役割が重要である。

令和6年9月定例会 商工労働常任委員会

◇健康医療ものづくり推進事業(医工連携)

松沢 令和5年度決算の7,160万円の事業のねらいについて

A. 本県には、国立がん研究センター東病院や千葉大学医学部附属病院など高度な研究機能を持つ医療機関が立地している。こうした特性を活かし、優れた技術を持つものづくり中小企業の健康医療ものづくり産業への参入を促すため、医療現場のニーズと中小企業のシーズとのマッチングから、医療機器の製品開発等への助成、開発した製品の販路支援に至るまでの伴走支援に取り組み、県内中小企業の活性化を図ることを目的としている。

※シーズ

企業が持つ独自の材料や素材、技術力や企画力等を指す

松沢 製品開発やマッチングの支援の成果について

A. 東葛テクノプラザを拠点として、平成26年から昨年度までの10年間で、累計588件のマッチングが行われ、そのうち、95件が共同開発に進んだ。本事業で最終的に製品化に至ったのは、30件となっている。補助金は、令和元年度から令和5年度末までに計26件の支援を行い、このうち、11件が製品化に至っている。

東葛テクノプラザ(柏市)

新産業の創出やベンチャー企業の育成等、産官学連携のもと、幅広い支援を行っている千葉県の産業支援施設



～市民の声を県政に～

令和6年9月定例会 商工労働常任委員会

◇県内周遊フリー切符

松沢 令和5年度決算の約2000万円の事業のねらいについて

A. JRや他の鉄道等が2日間乗り放題となるフリー切符は、交通の利便性を高めることにより、県内外から多くの観光客を誘致し、観光地を周遊してもらうために実施するもの。千葉県は東京から近いので、車による来訪客の比重がかなり高いが、今後少子高齢化で自動車を利用しないシニア層やファミリー層が増えていくだろうという中で、新たな観光需要として位置付けている。

松沢 令和5年度の事業に実績について

A. 発売枚数が約15000枚で、前年の令和4年の1.3倍の利用があった。

松沢の視点

従来の鉄道では千葉県内のJR東日本、小湊鉄道、いすみ鉄道、銚子電気鉄道、流鉄が対象であったが、本年度からは京成電鉄、新京成電鉄、北総鉄道、芝山鉄道が新たに加わり、フリーエリアも拡大した。連続2日間利用できるフリー切符のため、単に遊するだけでなく、宿泊客を誘客する取組みと連動させることも必要と考える。



出典 千葉県 HP

早春は販売期間が令和7年1月4日～2月27日、利用期間は令和7年1月4日から2月28日となりますので、この機会に、千葉をお得に周遊していただければと思います。

松沢 東京都との連携について

A. 令和元年度より、東京都と連携し、令和3年度からは、日本を代表する3つのがん専門病院である国立がん研究センター東病院と、同センター中央病院、がん研究会有明病院との共催により、がん領域に特化した共同のマッチング会を実施している。昨年度は、企業などから115名が参加し、3病院より、医療現場が抱える困りごと9件の事例が発表され、現在も、一部、製品開発に向けた医療機関と企業の話合いが行われている。

松沢 専門家派遣について

A. 計245件の企業相談に応じ、令和5年度は5社に対して計32回の企業支援を行った。

メディカルジャパン東京での千葉県ブース



松沢の視点

東葛テクノプラザを拠点に活動している「東葛医療ものづくり会」には、鎌ヶ谷市内の企業も参画している。千葉県では昨年度からメディカルジャパン東京に出展し販路拡大に努めているが、医療機器の製品化には医学、工学、工業の連携が欠かせない。コミュニティやネットワークを構築しながら、伴走支援することが重要と考える。